

写生紀行

寺田寅彦

青空文庫

去年の春から油絵の稽古けいこを始めた。冬初めごろまでに小さなスケッチ板へ二三十枚、六号ないし八号の画布へ数枚をかけた。寒い間は休んでことし若葉の出るころからこの秋までに十五六枚か、事によると二十枚ほどの画布を塗りつぶした。これらのものの大部分はみんなうちの庭や建物の一部を写生したものである。

静物もかかないわけではなかった。しかし花を生けて写生しようと思うとすぐにしおれたり、またこれに反して勢いのいいのは日ごとの変化があまりにはげしくて未熟なものの手に合わなかった。壺つぼやりんごもおもしろくない事はないが、せっかく「生きた自然」の草木が美しく、それに戸外が寒くなくていい時候に、室内の「死ナチュール・モルトんだ自然」と首っ引きをするのもつたいないような気がした。静物ないし自画像などは寒い時のために保留するというような気もあって、暖かいうちはなるべく題材を戸外に求める事に自然となってしまう。もつとも戸外と言つてもただ庭をあちから見たりこちらから見たり、あるいは二階か近所の屋根や木のこずえを見たところなど、もしこれがほんとうの画家ならば始めからんで相手にしないようなものを、無理に拾い出し、切り取っては画布に塗り込むのであった。それだから、どの絵にもどの絵にも同じ四よつ目垣めがきのどこかの部分顔を出し

ていたり、同じ屋根がどこかに出っ張ったりしている事になるのは免れ難い。

それでも私にとってはやはりおもしろくない事はなかった。たとえば四つ目垣めがきでも屋根でも芙蓉ふようでも鶏頭けいとうでも、いまだかつてこれでやや満足だと思うようにかけた事は一度もないのだから、いくらかいてもそれはいつでも新しく、いつでもちがった垣根や草木である。おそらく一生かいていてもこれらの「物」に飽きるような事はあるまいと思う。かく事には時々飽きはしても。

展覧会などで本職の画家のかいた絵を見ると、美しい草木や景色や建築物やが惜しげもなく材料に使われている。今の自分から見るとこれらの画家は実にうらやましい有福な身分だと思う。世の中に何がぜいたくだと言つて、このような美しく貴重な自然を勝手自在にわが物同様に使用し時には濫費してもいいという、これほどのぜいたくは少ないと思う。これに匹敵するぜいたくはおそらくただ読書ぐらいのものかもしれない。

そんな絵を見るたびに、きつと自分も門から外へ出てかいてみたくなるのである。一歩門を出さえすれば、ついその路地にでも川岸にでも電車停留場にでも、とにかくうちの庭とは比較にならないほどいい題材が、もったいないように無雑作に、顧みられずにころがっている。わざわざ旅費を出して幾日も汽車を乗り回す必要などはないように思われる。

しかしどうもこの東京の街頭に画架をすえて、往来の人を無視してゆっくり落ち着いて、目を細くしたり首をひねったりする勇氣は——やってみたら存外あるかもしれないが、考えてみただけではどうもなさそうに思われる。せめて郊外へでも行けばそういう点でいくらかぐあいのいい場所があるだろうと思つたが、しかし一方でまたあまり長く電車や汽車に乗り、また重いものをさげて長途を歩くのは今の病氣にさわるという懸念があつた。

ことしの秋になつて病氣のぐあいがだいぶよくなつたし、医者も許しましたすすめてくれたので、どこかへためしに行つてみようと思つと、あいにくなもので時候はずれの霖雨りんうがしばらくつづいて、なかなか適当な日は来なかつた。やつと天氣がよくなつて小春の日光の誘惑を感じるころには、子供が病氣になつていてどうもそういう心持ちになれなかつた。

十月十五日。朝あまり天氣が朗らかであつたので急に思い立って出かける事にした。このあいだM君と会つた時、いつかいつしよに大宮おおみやへでも行つてみようかという話をした事を思い出して、とにかく大宮まで行つてみる事にした。絵の具箱へスケツチ板を一枚入れて、それと座ぶとん代わりの古い布切れとを風呂敷ふろしきで包み隠したのをかかえて市内電車で巢鴨すがもまで行つた。省線で田端たばたまで行く間にも、田端で大宮行きの汽車を待つてゐる間に

も、目に触れるすべてのものがきように限って異常な美しい色彩で輝いているのに驚かされた。停車場のくすぶった車庫や、ペンキのはげかったタンクやてんてつだい転轍台のようなものまでも、小春の日光と空気の魔術にかかつて名状のできない美しい色の配合を見せていた。それに比べて見ると、そこらに立っている婦人の衣服の人工的色彩は、なんとなくこせこせした不調和な継ぎ合わせもののように見えた。こんなものでも半年も戸外につるして雨ざらしにして自然の手にかけたら、少しは落ちついたりいい色調になるかもしれないと思ったりした。実際洗いざらしの鉄道工夫の青服などは、適当な背景の前には絵になるものの一つである。ヴェニスのもっとも美しい半分は自然のためによごれさらされているおかげである。乗り込んだ汽車はどこかの女学校の遠足で満員であった。汽車が動きだすと一団の生徒らは唱歌を歌いだした。それはなんの歌だかわからないが、二部の合唱で、静かな穏やかな清らかな感じのするものであった。汽車のゴーゴーという単調な重々しい基音の上に、清らかに澄みきった二つの音の流れがゆるやかな拍子で合ったり離れたり入り乱れて流れて行く。窓の外にはさらに清く澄みきった空の光の下に、むさしの武蔵野の秋の色の複雑な旋律とハーモニが流れて行った。

大宮駅でおりに公園までぶらぶら歩いた。駅前の町には「ほたるごかほう螢五家宝」というお菓子を

売る店が並んでいる。この「五家宝」という名前を見ると私の頭の中へは、いつでも埒^{さいた}玉^{まけん}県の地図が広げられる。そうしてあのねちねちした豆の香をかぐような思いがする。

ある町の角^{かど}をまがって左側に蠟^{ろう}細^{さい}工^{こう}の皮膚病の模型を並べた店が目についた。人間の作ったあらゆる美しくないものの中でもこれくらい美しくないものもまれである。きょうのような日に見るとその醜^{みにく}さがさらに強められる、こんなものや菊人形などというものに比べるとたとえば屠^{とぎ}牛^{ぎゅう}場^{じょう}の内部の光景のほうがまだいくらか美しいくらいだと思う。牛や豚の残^{ざん}骸^{がい}はあれでも自然の断片である。

悪い醜^{みにく}い病をなおす薬を売るために、病の醜^{みにく}さを世に宣伝する、このやり方が今の新聞や婦人雑誌のやり方によく似ている。その主旨ははなはだめでたい。しかしそういう方法ではたして世の中の醜^{みにく}い病が絶やされるものであろうか。薬はよく売れても、おそらく病のほうはかえってますます広がりはいしないだろうか。もう少し積極的なあるものの力でそういう病にかからない根本的素質を養う事はできないものだろうか。

公園の入り口まで行ってちよつと迷った。公園の中よりは反対の並み木道を行ったほうが私の好きな画題は多いらしく思われた。しかしせっかくここまで来て、名高いこの公園を一見しないのも、あまりに世間というものに申し訳がないと思つて大きな鳥居をくぐつ

てはいつて行つた。

いつのまにか宮の裏へ抜けると、かなり広い草原に高くそびえた松林があつて、そこにさつきの女学生が隊を立てて集まつていた。遠くで見ると草花が咲いているようで美しかった。

腹がへつたので旗亭^{きてい}の一つにはいつて昼飯を食つた。時候はずれでそして休日でもないせいか他にお客は一人もなかった。わざわざ一人前の食膳^{しょくぜん}をこしらえさせるのが気の毒なくらいであつたが、しかし静かで落ち着いてたいへんに気持ちがよかつた。小さな座敷の窓には柿^{かき}の葉の黄ばんだのが蠟石^{ろうせき}のような光沢を見せ、庭には赤いダリアが燃えていた。一つとして絵にならないものはないように見えた。

飯を食いながら女中の話を聞くと、せんだつてなんとかいう博士がこの公園を見に来て、これはたいへんにいい所だからこの形勝を保存しなければいけないという事になり、さらに裏手の丘までも公園の地域を拡張する事になった。「そうなると私どもはここを立ちのかなければなりません」という。非常に結構な事だと思つた。近年急に襲うて来た「改造」のあらしのために、わが国の人の心に自然なあらゆるものが根こぎにされて、そのかわりにペンキ塗りの思想や蠟細工^{ろうさいく}のイズムが、新開地の雜貨店や小料理屋のように雜然と無^ぶ

格好かつこうに打ち建てられている最中に、それほど思われぬ天然の風景がほうぼうで保存せられる事になるのは、せめてもの事である。なろう事なら精神的の方面でもどこかの山や森に若干の形勝を保存してもらいたい。こんな事を考えながら一わんの鯉こいこくをすすつてしまった。

「絵をおかきになるなら、向こうの原っぱへおいでになるといい所がありますよ」と教えられたままにそのほうへ行つてみる。近ごろの新しい画学生の間にも重宝がられるセザンヌ式の切り通し道の赤土の崖がけもあれば、そのさきにはまた旧派向きの牛飼いの小屋もあった。いわゆる原っぱへ出ると、南を向いた丘の斜面の草原には秋草もあれば桜の紅葉もあったが、どうもちようどぐあいのいい所をここだと思ひ切りにくいので、とうとうその原っぱを通り越して往還路へおりてしまった。道ばたにはところどころに赤く立ち枯れになった黍きびの畑が、暗い森を背景にして、さまざまの手ごろな小品を見せていた。しかしもう少しいい所をと思つて歩いているうちに、とうとうぐると一回りして元の公園の入り口へ出てしまった。

入り口の向こう側に妙な細工もののような庭園があつた。その中に建てた妙な屋台造りに生き人形が並べてあつた。鞍馬山くらまやまで牛若丸うしわかまるが天狗てんぐと剣術をやっているのがあつた。

その人形の色彩から何からがなんとも言えない陰惨なものである。この小屋の上にそびえた美しい老杉ろうさんまでがそのために物すごく恐ろしく無気味なものに感ぜられた。なんのためにはわざわざこんなものが作つてあるのか全くわからない。

秋の日がだんだん低く落ちて行つた。あまりゆるゆるしては、せつかくここまで来たのに一枚もかかずに帰る事になりそうなので、行き当たり次第に並み木道を左へ切れていつて、その甘藷畑かんしょばたけの中の小高い所にとにかくも腰をかけて絵の具箱をあけた。なんとなしに物新しい心ときめきといったようなものを感じた。それは子供の時分に何か長くほしがつていた新しいおもちゃを手に入れて始めてそれを試みようとする時、あるいは何かの研究に手をつけて、始めて新しい結果の曙光しやうこうがおぼろに見え始めた時に感じるのと同じようなものであつた。天地の間にあるものはただ向こうの森と家と芋畑とそして一枚のスケッチ板ばかりであつた。

向こうの小道をまれに百姓が通つたが、わざわざ自分の所までのぞきに來る人は一人もなかつた。

どれだけ時間が経過したかまるでわからなかつた。ただ律儀りちぎな太陽は私にかまわずだんだんに低くたれ下がつて行つて景色の変化があまりに急激になつて來るので、いいかげん

に切り上げてしまわなければならなかった。軽く興奮してほてる顔をさらに強い西日が照りつけて、ちやうど酒にでも微酔したような心持ちで、そしてからだが珍しく軽快で腹がいいぐあいにへつていた。

停車場まで来ると汽車はいま出たばかりで、次の田端^{たばた}止まりまでは一時間も待たなければならなかった。構外のWCへ行つてその低い柵越^{さくこ}しに見ると、ちやうどその向こう側に一台の荷物車があつて人夫が二人その上にあがつて材木などを積み込んでいた。右のほうのバックには構内の倉庫の屋根が黒くそびえて、近景に積んだ米俵には西日が黄金のように輝いており、左のほうの澄み通った秋空に赤や紫やいろいろの煙が渦巻^{うずま}きのぼっているのがあまりに美しかったから、いきなり絵の具箱を柵^{さく}の上に置いてWCの壁にもたせかけ大急ぎのスケッチをしようとした。板はただ一枚しかなかったから、さっきの絵の裏へきわめて大まかにかき始めた。

場所が場所だけに見物がだんだん背後に集まつて来た。車夫もくれば学生も来ているようであった。しかし大急ぎでこの瞬間の光彩をつかもうとしてもがいている私には、とてもそんな人たちにかまつているだけの余裕はなかった。それでも人々の言葉は時々耳にはいる。私が新しくブラシをおろすたびに、「煙だよ」とか「電柱だよ」とか一々説明して

くれる人もあつて、なんだか少し背中や首筋のへんがくすぐったいような気持ちもした。そういう人の同情に報いるためには私の絵がもう少し人の目にうまく見えなければ気の毒だと思ふのであつた。

ほんのだいたいの色と調子の見当をつけたばかりで急いで絵の具箱を片付けてしまった。さてふり返つて見るともうだれもいなかった。人々の好奇心の目的物はやっぱりこの私ではなくて「絵をかいてるどこかの人」であつたのである。このぶんなら東京の町中でもどうやら写生ができそうな氣もした。

行きにいっしょであつた女学校の一団と再び同じ汽車に乗り合わせたが、生徒たちは行きとはまるで別人のように活発になつていた。あの物静かな唱歌はもう聞かれなくなつて、にぎやかなむしろ騒々しい談笑が客車の中に沸き上がった。小さなバスケットや信玄しんげんぶく袋ろの中から取り出した残りものの塩せんべいやサンドウィッチを片付けていた生徒たちの一人が、そういうものの包み紙を細かく引き裂いては窓から飛ばせ始めると、風下の窓から手を出してそれを取ろうとするものが幾人も出て来た。窓ぎわにすわつていた若い商人ふうの男もいっしょになつてそのような遊戯を享樂していた。この暖かい小春の日光はやはり若い人たちの血のめぐりをよくしたのであろう。このような血のめぐりのいい時に、

もしほんとうの教育、人の心を高い境地に引き上げるような積極的な教育が施されたら、どんなに有効な事であろう。

元気のいい人たちの中には少数の沈んだ顔もあった。けんかでもしたのかハンケチを顔に押しあてて泣いているのもあった。これも小春の日光の効果の一面かもしれない。

途中から乗った学生とも職工ともつかぬ男が、ベンチの脇掛ひしかけに腰をおろして周囲の女生徒にいろんな冗談を言つて笑わしていた。「学校はどこ……小石川こいしかわ？、○○？ △△

？……」などと女学校の名前らしいものを列挙していたが生徒のほうではだれもはつきりした答えを与えないでただ笑っていた。どうして小石川という見当をつけたかが私には不思議に思われた。それぞれのエキスパートが品物の産地を言い当てるように、この男にはやはり特別な眼識が備わっているのかと思われた。そう言われるとなるほどなんとなく小石川らしくも思われない事はなかった。

田端たばたへ着くともういいよい日が入りかけた。夕日に染められた構内は朝見た時とはまるでちがったさらにさらに美しい別の絵になっていた。数多い展覧会の絵の中で一枚もこの美しい光景を描いたものを見ないのが不思議に思われた。しかしいくら日本の鉄道省でも画家の写生を禁じているとは考え得られなかった。

十月十六日、日曜。きのうの漫歩がからだにも精神にも予想以上にいい効果があったように思われたので、きょうもつづけて出かけてみる事にした。きのう汽車の窓から見ておいた浦和うらわ付近の森と丘との間を歩いてみようと思ったのである。きのう出る時にはほとんどなんのあてもなしであったのが、ただ一度の往復で途中へ数えきれないほどの目当てができてしまった。自分らの研究の仕事でもよく似た事がある。ただ空で考えるだけでは題目イマはなかなか出て来ないが、何か一つつつき始めるとその途中に無数の目当てができすぎて困るくらいである。そういう事でも、興味があるからやるといよりは、やるから興味がでける場合がどうも多いようである。

きょうは日曜で汽車は不合理な不正当な満員であった。ほとんど身動きもできないほどで、出る時に出来るかどうかと思うくらいであった。網あみ棚だなに絵の具箱をのせる空所もなかったのでベンチにのせかけて持っているうちに、誤って取り落とすと隣に立っていた老人の足に当たった。老人はちよつとおこつたような顔を見せたが、驚いてあやまつたらすぐに心が解けたようである。私はこんな時にいつでも思う事がある。自分はなぜ平気ですましていて、もし面と向かっておこられたら、そんな所に足をもって来ているやつがあ

るか気をつけろとどなりつけるだけの勇氣がないのだろう。この勇氣がなくてはとても今の世間をのんびりした気持ちでは渡って行かれないらしい。昔は命を的にしなければ、うつかり誤つてでも人の足も踏めず、悪口も無論言われなかった。私の血縁の一人は夜道で誤つて突き当たった人と切り合つて相手を殺し自分は切腹した。それが今では法律に触れない限り、自分のめがねで見て気に入らない人間なら、足を踏みつけておいて、さかさまにのしるほうが男らしくていいのである。そういう事を道楽のようにして歩いている人格者もある。それで私は自分の子供らの行く末を思うなら、そういうふうになんか教育しなければさきで困るのではないかと思う事もしばしばある。

「赤羽^{あかばね}で今電気をたくところをこさえているが、それができるとはや……」こんな事を話している男があつた。電気をたくという言葉がおもしろかつた。日本語もこういうぐあいに活用させる人ばかりだったら、字を見なければわからないあるいは字を見ても読めないような生硬な術語などをやめてしまつて、もう少し親しみのあるものに代える事ができそうである。国語調査会とかいうものでこういういい言葉を調べ上げたらよさそうに思われた。

浦和の停車場からすぐに町はずれへ出て 甘^{さつまいも} 藪や里芋やいろいろの畑の中をぶらぶら

歩いた。とある雑木林の出っ鼻の落ち葉の上に風呂敷ふろしきをしいてすわり込んで向かいの丘を写し始めた。平生はただ美しいとばかりで不注意に見過かごしている秋の森の複雑な色の諧か調いちようは全く臆病おくびような素人しろうと絵かきを途方にくれさせる。まだ目の鋭くないわれわれ初学者にとつてはおそらくこれほどいい材料はあるまい。しかし黒人くろうとになればたぶんただ一面のちやぶ台、一握りの卓布の面の上にもやはりこれだけの色彩の錯綜さくそうが認められるのであろう。それほどになるのも考えものであるとも思うが、しかしたとえ楽しみ事ししろやつぱりそこまで行かなければつまらないとも思う。

畑に栽培されている植物の色が一切れごとにそれぞれ一つも同じものはない。打ち返されて露出している土でも乾燥の程度や遠近の差でみんなそれぞれに違った色のニュアンスがある。それらのかなりに不規則な平面的分布が、透視パースペクチヴ法ザという原理に統一されて、そこに美しい幾何学的の整合を示している。これらの色を一つ取りかえても、線を一つ引き違えても、もうだめだという気がする。

十歳ぐらいの男の子が二人来て後ろのほうで見ていた。「いいねえ」「いい色だねえ」などと言っているのがやはり子供らしい世辞のように聞こえた。遠慮深い小さな声で言っているのであつたがさすがにきのうの大宮の車夫とはちがって、絵の中の物体を指摘した

りしないで「色」を言ったりするところがそれだけ新しい時代の子供であるのかもしれない。

ここはいいかげんに切り上げて丘の上の畑の中を歩いた。黍^{きび}を主題にしたのが一枚かき
たかったがどうもぐあいのいい背景が見つからなかった。同じ畑の中をなんべんも往復し
ているのを少し離れた畑で働いていた農夫が怪しんでいるようで少し気が引けた。自分が
農夫になって見た時にこの絵の具箱をぶら下げて歩いている自分がいかにも東京ののらく
ら者に見えるので心細かった。とうとう鉄道線路のそばの崖^{がけ}の上に腰かけて、一枚ざつと
どうにか書き上げてしまった。

十月十八日、火曜。午後に子供を一人つれて、日暮里^{につぼり}の新開町を通って町はずれに出た。
戦争のためにできたらしい小工場が至るところに小規模な生産をやっている。ともかくも
自分の子供の時にはみんな貴重な舶来物であった品物が、ちゃんとここらのこんな見すば
らしい工場でできてきれいなラベルなどをはられて市場に出てくるのであろう。それだけ
でも日本がえらくなつたには相違ない。これでもし世界じゅうの他の国が昔のままに「足
踏み」をして、日本の追いつくのを待っていてくれたらさぞいいだろう。

町はずれに近く青いペンキ塗りの新築が目についた。それを主題にしたスケッチを一枚かこうと思つて適当な場所を捜していると、ちゃんとした本物の画学生らしいのが二人、同じ「青い家」を取り入れて八号ぐらいの画布をかいているのに出会つた。一人は近景に黍の行列を入れ一人は溝にかかつた板橋を使つていた。一人のは赤黒く一人のは著しく黄色っぽい調子が目についた。

私は少し行き過ぎて、深い掘割溝の崖の縁にすわつて溝渠と道路のパースペクチャーをまん中に入れたのを描いた。近所の子供らが入り代わり何人となくのぞきに來た。このへんの子供にはだいたい専門的の知識があつて「チューブ」だの「パレット」だのという言葉を使つているのが聞こえた。そして浦和へんの子供とはすべての質が違つていた。

歸りに、腰に敷いていた大きな布切れのちりを払おうとした拍子に取り落とした。それが溝の崖のずっと下のほうに引つかかつて容易には取り上げる事ができないので、そのままにして歸つた。この布切れが今でもやつぱり引つかかつているかもしれない。この日かいた絵を見ると、絵の下の方にこの布切れがぶら下がっているような気がしてしかたがない。人殺しをした人間のある場合の心持ちはどこかこれと似たものがあるのかもしれない。(中略)

十月二十九日、土曜。王子電車で小台の渡しまで行つた。名前だけで想像していたこの渡し場は武蔵野の尾花の末を流れる川の岸のさびしい物哀れな小駅であつたが、来て見るとまず大きな料理屋兼旅館が並んでいる間にペンキ塗りの安西洋料理屋があつたり、川の岸にはいろんな粗末な工場があつたり、そして猪苗代湖の水力で起こした電圧幾万幾千ボルトの三相交流が川の高い空をまたいでいるのに驚かされた。

先月からの雨に荒川があふれたと見えて、川沿いの草木はみんな泥水をかむつたまに干上がつて一様に情けない灰色をしていた。全色盲の見た自然はあるいはこんなものだろうかという気がして不愉快であつた。

高压電線の支柱の所まで来ると、川から直角に掘り込んで来た小さな溝渠があつた。これに沿うて二条のトロのレールが敷いてあつて、二三町隔てた電車通りの神社のわきに通じている。溝渠の向こう側には小規模の鉄工場らしいものの廃墟がある。長い間雨ざらしになつてゐるらしい鉄の構造物はすっかり赤さびがして、それが青いトタン屋根と美しい配合を示している。煙突なども倒れかかったままになつてなんとなく荒れ果てたながめである。この工場のために掘つたかと思われる裏のため池には掘割溝から川の水を

導き入れてあつた。その水門がくずれたままになつてゐるのも画趣があつた。池の対岸の石垣いしがきの上には竹やぶがあつて、その中から一本の大榎おおえのきがそびえているが、そのこずえの紅や黄を帯びた色彩がなんとも言われなく美しい。木の影には他の工場の倉庫らしい丹塗にぬりの単純な建物が半面を日に照らされて輝いている。その前には廃工場のみぎわに茂つた花すすきが銀のように光っている。

溝のこつちに画架をすえて対岸の榎と赤い倉庫とすすきとの三角形を主題にしてかき始めた。

かいてゐるすぐそばには新しい木の香のする材木が積んであつた。また少し離れた所には大きな土管がいくつも砂利じやりの上にくわしてあつた。私がそこへ来る前から、中学の一年か二年ぐらいと見える子供がただ一人材木の上に腰をかけていたが、私がかき始めるとそばへ来ておとなしく見ていた。そしていつまでもそこを離れないで見ていたのであつた。そのうちに土方のようなものが二三人すぐ背後のほうへ来て材木の上に腰かけて何かしきりに話し合つていた。だれかそこに来るはずの人——それはたぶん親方が何かはまだ来ていないのを待ち遠しがつてうわさをしてゐるらしかった。そばに「絵をかいてゐる男」などはまるで問題にならないらしいほど熱心に話し合つていた。

そのうちに荷馬車の音がしておおぜいの人夫がやって来て、材木をころがしては車に積み始めたので、私はしばらく画架を片よせて避けなければならなかった。そこで少し離れた土管に腰をかけて煙草^{たばこ}を吸いながらかきかけの絵の穴を埋める事を考えていた。

人夫の中には絵をのぞきに来るものもあった。そしていろいろ人を笑わせるつもりらしい粗暴なあるいは卑猥^{ひわい}な言語を並べたりした。「あの曲がった煙突をかくといいんだがなあ」などという者もあった。「文展へ行つて見ろ、島村観山とか寺岡広業とか、ああいうのはみんな大家だぜ、こんなのとはちがわあ」「あれでもどつかへ持つて行きやあ、三十円や五十円にやあなるんだよ」などいうのも聞こえた。

さっきの子供はいつまでもそこいらを離れずにぶらぶらしていた。遠足にしてはただ一人というのおかしかった。よほど絵が好きなので、こうして油絵のできて行く道筋を飽きずにおしまいまで見届けようとしているのかと思つてもみた。

一度去つた荷車と人夫は再び歸つて来た。彼らの仕事しながらの会話によつて対岸の廃工場が某の鑄物工場であつた事、それがようやく竣^{しゅんせい}成^{せい}していいよ製造を始めようとするのとたんに経済界の大変動が突発してそのまま廃墟^{はいきょ}になつてしまつた事などを知つた。絵の具箱を片付けるころには夕日が傾いて廃墟のみぎわの花すすきは黄金の色に染めら

れた。そこに堆積^{たいせき}した土塊のようなものはよく見るとみな石炭であつた。ため池の岸には子供が二三人釣^つりをたれていた。熔炉^{ようろ}の屋根には一羽のからすが首を傾けて何かしら考えていた。

絵として見る時には美しくおもしろいこの廃墟の影に、多数の人の家の悲惨な運命が隠れているのを、この瞬間まで私は少しも考えないでいた。一度気がつくともう目の前の絵は消えてそこにはさまざまな悲劇の場面が現われた。

利欲のほかに何物もない人たちが戦時の風雲に乗じていろいろなきわどい仕事に手を出し、それがほとんど予期されたはずの変動のために倒れたのはどうにもしかたがないとしても、そういう人の妻子の身の上は考えてみれば気の毒である。

突然すぐ前の溝^{みぞ}の中から呼びかけるものがある。見ると川のほうから一艘^{そう}の荷船がいつのまにかはいって来ている。市中の堀^{ほり}などでよく見かけるような、船を家として渡って行く家族の一つである。舳^{へさき}に立っている五十近い男が今呼びかけたのは私ではなくて、さつきから私の絵を見ていた中学生であつた。

子供に関するすべての事が稲妻のひらめくように私の頭の中に照らし出された。きようは土曜である。市の中学からおそらく一週間ぶりに帰った子供はこの一夜を父母と同じ苦^{とま}

の下で明かそうとするのであろう。それを迎えに来た親と、待ちくたびれた子供とが、船と岸とで黙って向かい合っているさびしい姿を見比べた時に、なんだか急に胸のへんがくすぐたくなつて知らぬまに涙が出ていた。なんのための涙であつたか自分でもわからない。

絵の世界はこの上もなく美しい。しばらくこの美しい世界にのがれて病を養おうと思つても、絵の底に隠れた世の中が少しの心のすきまをうかがつてすぐに目の前に迫ってくる。これは私の絵が弱いのか世の中が強いのか、どっちだかこれもよくわからない。

一つの工場が倒れる一方に他の工場は新たに建てられている。さっきの材木もやはりどこかの工場である事が人夫の話から判断された。工業が衰えたわけでもないらしい。個体が死んでも種が榮えれば国家は安泰である。個体の死に付随する感傷的な哀詩などは考えないほうが健全でいいかもしれない。

工場のみならず至るところに安普請の家が建ちかかっているのがこのあいだじゅう目についていた。ひとところ騒がしかった住宅難の解決がこんなふうにしてなしくずしについているかと思われた。まだ荒壁が塗りかけになつて建て具も張つてない家に無理無体に家財を持ち込んで、座敷のまん中に築いた夜具や箆筒たんすの胸壁の中で飯を食っている若夫婦が目

についたりした。

新開地を追うて来て新たに店を構えた仕出し屋の主人が店先にほおづえ頬杖を突いて行儀悪く寝ころんでいる目の前へ、膳ぜんわん碗の類を出し並べて売りつけようとしている行商人もあつた。そこらの森陰のきたない藁屋わらやの障子の奥からは端唄はうたの三味線をさらっている音も聞こえた。こうしてわが大東京はだらしく無設計に横に広がって、美しい武蔵野むさしのをどこまでもと蚕食して行くのである。こんなにしなくても市中の地の底へ何層楼のアパートメントでも建てたほうがよさそうに思われる。そうしないと、おしまいには米や大根を地下室の棚たなで作らなければならない事になるかもしれない。

ベルリンの郊外でまだ家のちつとも建たない原野に、道路だけが立派にみがいたアスファルト張りにできあがつて、美術的なランプ柱が行列しているのを、少しばかりかしいようにも感じたのであつたが、やっぱりあししなければこうなるのは当たり前だと思われた。

思うに「場末の新開町」という言葉は今の東京市のほとんど全部に当てはまる言葉である。

十一月二日、水曜。渋谷から玉川電車に乗った。東京の市街がどこまでもどこまでも続いているのにいつもながら驚かされた。

世田が谷という所がどこかしら東京付近にあるという事だけ知って、それがどの方面だかはきょうまでつい知らずにいたが、今ここを通って始めて知った。なるほど兵隊のいそうなという事が町に並んでいる店屋の種類からも想像されるのであった。

駒沢村というのがやはりこの線路にある事も始めて知った。頭の中で離れ離れになつてなんの連絡もなかったいろいろの場所がちようど数珠の玉を糸に連ねるように、電車線路に貫ぬかれてつながり合つて来るのがちよつとおもしろかった。

学校で教わつたり書物を読んだりして得た知識もやはり離れ離れになりがちなものである。ただ自分が何かの問題にまともにぶつかつて、そのほうの必要からこれらの知識を通り抜ける時に、すべての空虚な知識が体験の糸に貫ぬかれて始めて生きて連結して来る。これと同じようなものだと思う。

農科の実科の学生が二三人乗っていた。みんな大きな包みのようなものを携えている。休日でもないのにどこへ行くのだろうと思つて気をつけていた。すると途中からもう一人同じ帽章をつけたのが乗り込んで、いきなり入り口に近く腰掛けていた一人の肩をたたき

「オイ、どうした」と声をかけた。その言葉の響きのある機微な特徴で、私はこの学生が固有の日本人でない事を知った。気をつけてみると、つい私の隣にかけていた連れの一人の読んでいる新聞が漢字ばかりのものであった。容貌ようぼうから見るとどうもシナではなくて朝鮮から来た人たちらしく思われた。

玉川たまがわの川原では工兵が架橋演習をやっていた。あまりきらきらする河原には私の捜すような画題はなかったので、川とこれに並行した丘との間の畑地を当てもなく東へ歩いて行つた。広い広い桃畑があるが、木はもうみんな葉をふるってしまつて、果実を包んだ紙の取り残されたのが雨にたたてくつついている。少しはなれて見ると密生したこずえの色が紫色にぼうとけむつたように見える。畑の間を縫う小道のそばのところどころに黄ばんだ榛はんの木のこずえも美しい。

丘の上へ登つてみようと思つて道を捜していると池のようなもののそばに出た。さざ波一つ立たない池に映つた丘の森の色もまたなく美しいものである。みぎわに茂る葭あしの断え間に釣つりをしてる人があつた。私の近づく足音を聞くと振り返つてなんだかひどく落ち付かぬふうを見せた。もしこの池で釣つり魚をする事が禁ぜられてでもいるか、そうでないすれば、この人はやはり自分のようなたちの、言わばすわりの悪い良心をもった人間だろ

うと思われた。そして悪い事をしていなくても、人から悪い事をしていると思われはしないかと思うと同時に、実際悪い事をしていると同じ心持ちになるというたちの男かもしれないと思った。そして同病相哀れむ心から私は急いでそこを通り過ぎねばならなかった。

ようやく丘の下の下往還に出ると、ちょうどそこから登る坂道があった。登りつめるときれいな芝を植えた斜面から玉川沿いの平野一面を見晴らす事ができた。しかしそれよりも私の目をひいたのは、丘の上の畑の向こう側に柿かきの大木が幾本となく並んでその葉が一面に紅葉しているのであった。その向こうは一段低くなっていると見えて柿のこずえの下にある家の藁葺わらぶき屋根だけが地面にのっかっているように見えていた。ここで画架を立てて二時間余りを無心に過ごした。

崖がけをおりて停車場のほうへ行く道ばたには清らかな小流れが音を立てて流れていた。小川の岸に茂るいろいろの灌かん木ぼくはみんなさまざまの秋の色彩に染められていた。小川と丘との間の一帯の地に、別荘らしい家がところどころに建っている。後ろには森を背負い、門前の小川には小橋がかかっている、なんとなしに閑寂な趣のあるいい土地だと思う。しかしこの小川の流れが衛生のほうから少し気になる点もあると思った。

電車は小学校の遠足のかえりでいっぱいであった。よんどころなく車掌台に立つて外を

見ていると、ある切り通しの崖がけの上に建てた立派な家のひさしが無残に暴風にこわされてそのままになっているのが目についた。液体力学の教えるところではこういう崖かどの角は風力が無限大になって圧力のうんと下がろうとする所である。液体力学を持ち出すまでもなく、こういう所へ家を建てるのは考えものである。しかしあるいは家のほうが先に建つていたので切り通しのほうがあとにできたかもしれない。そうだとすると電車の会社はこの家の持ち主に明白な損害を直接に与えたものだという事が科学的に立証されるわけである。これによく似た場合は物質的のみならず精神的の各方面にも至るところにあるが損害をかけた人も受けた人も全然その場合の因果關係に心づかない事が多いように思われる。そのおかげでわれわれは枕まくらを高くして眠つていられる。そして言論や行動の自由が許されている。春しゅんじゅう秋の筆法が今は行なわれないのであろう。そうでなければこんな事もうっかりは言われない。

世田が谷近くで将校が二人乗った。大尉のほうが少佐に対して無難作な言語使いでしきりに話しかけていた。少佐は多く黙っていた。その少佐の胸のボタンが一つはとれて一つはとれかかっているのが始終私の気にかかった。

同乗の小学生を注意して見ると、もちろんみんな違った顔であるが、それでいて妙にみ

んなよく似た共通の表情がある。軍人を見てもやつぱりそうであるらしい。これがどうしてそうなるかを突きとめる事はある人々にきわめて重大な問題であると思われる。われわれの見た蟻ありや蜜蜂みつばちのように個体の甲と乙との見分けがつかなくならなければその「集団」はまだ本物になっていないと思う。

十一月十日、木曜。池いけ袋ぶくろから乗り換えて東上線とうじょうせんの成増駅なりますまで行つた。途中の景色が私には非常に気にいった。見渡す限り平坦へいたんなようであるが、全体が海拔幾メートルかの高台になっている事は、ところどころにくぼんだ谷があるので始めてわかる。そういう谷の所にはきまつて松や雑木の林がある。この谷の遠く開けて行くさきには大河のある事を思わせる。畑の中に点々と碁布した民家は、きまつたように森を背負つて西北の風を防いでいる。なるほど吹きさらしでは冬がしのがれまい。

私の郷里のように、また日本の大部分のように、どちらを見てもすぐ鼻の先に山がそびえていて、わずかの低地にはうっとうしい水田ばかりしかない土地に育つたものには、このような景色は珍しくて、そしていかにも明るく平和にのびのびした感じがする。これと言つて特にさすもののないために一見単調なように見えるが、その中かなり複雑な、し

かし柔らかな変化は含まれている。あまりに強い日常の刺激に疲れたものの目にはこのようながめがまたなくありがたい。

米を食って育つていながらこういう事をいうのはすまないが、水田というものの景色はなぜか私には陰気な不健康な感じを与える。またいくら広くてもその面積はわれわれの下駄^たばきの足を容れる事を許さないために、なんとなく行き詰まった窮屈な感じを与えるが、畑地ならば実際どこでも歩いて行けば行かれると思うだけでも自由なのびやかな気がする。ねぎや大根が至るところに青々として、麦はまだわずかに芽を出した所があるくらいであった。このあいだまで青かったはずの芋の葉は数日來の霜に凍^いててすっかりうだったようになつたのが一つ一つ丁寧に結び束ねてあつた。

成増でおりて停車場の近くをあてもなく歩いた。とある谷を下つた所で、曲がりくねつた道路と、その道ばたに榛^{はん}の木が三四本まっ黄に染まつたのを主題にして、やや複雑な地形に起伏するいろいろの畑地を画布の中へ取り入れた。

歸りに汽車の窓から見た景色は行きとは見違えるほどいつそう美しかった。すべてのものが夕日を浴びて輝いている中にも、分けて谷の西向きの斜面の土の色が名状のできない美しいものに見えた。線路に沿うたとある森影から青い洋服を着て、ミレーの種まく男の

着ているような帽子をかぶった若者が、一匹の飴色あめいろの小牛を追うて出て来た。牛の毛色が燃えるように光って見えた。それはどうしてもこの世のものではなくてだれかの名画の中の世界が眼前に生きて動いているとしか思われなかった。

ほとんど感傷的になって見とれている景色の中には、こんなに日が暮れかかってもまだ休まず働いている農夫の家族が幾組となくいた。赤子をおぶって、それをゆさぶるような足取りをして、麦の芽をふんでいる母親たちの姿が哀れに見えた。こうして日の暮れるまで働いておいて朝はもう二時ごろから起きて大根の車のあと押しをして市場へ出るのであらう。

市に近づくに従って空氣の濁って来るのが目にも鼻にも感じられた。風のない市の上空には鉛色の煙が物すごくたなびいていた。

もしも事情が許すなら、私はこの広い平坦へいたんな高台の森影の一つに小さな小家を建てて、一週のうちのある一日をそこに過ごしたいと思ったりした。これまでいろいろのいわゆる勝地に建っている別荘などを見ても、自分の気持ちにしっくりはまるようなものはこれと言つて頭にとどまっていな。海岸は心騒がしく、山の中は物恐ろしい。立派な大廈たいかこうろ高樓ろうはどうも氣樂そうに思われない。頼まれてもそういう所に住む気にはなれそうもない。

しかしこの平板な野の森陰の小屋に日当たりのいい縁側なりヴェランダがあつてそこに一年のうちの選ばれた数日を過ごすのはそんなに悪くはなさそうに思われた。

ついそんな田園詩の幻影に襲われたほどにきょうの夕日は美しいものであつた。

長い間宅^{うち}にばかりくすぶつていて、たまたまこのよい時節に外の風に吹かれると気持ちはいいようなものの、あまりに美しい自然とそこにも付きまとう世の中の刺激が病余の神経には少しきすぎるようでもある。もうそろそろ寒くはなるし、写生行もしばらく中止していいよ静物でもやり始めなければなるまいと思っている。

（大正十一年一月、中央公論）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

写生紀行

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>